

バルセロナ日本人学校の教育と学校運営

前バルセロナ日本人学校 校長

埼玉県川越市立霞ヶ関小学校 校長 増田 正博

キーワード：学校運営，学校教育，国際理解教育，現地校交流

1. はじめに

スペインの北東部、地中海に面し古くから港町として栄えた町バルセロナは、人口約150万人、スペイン第2の都市として国の経済を支えている。また、文化面では、絵画ではピカソ・ダリ・ミロ、建築家ではガウディ等に代表される多数の芸術家を輩出している。気候は温暖で四季があり、海と山に囲まれた国際都市である。その昔、当地はカタルーニャという一つの国であった歴史から、独立心旺盛な気風に溢れ、スペイン語に加えてカタルーニャ語が公用語として定められている。当地の公立学校の授業は、カタルーニャ語で行われている。

2. 学校概要

(1) 地域環境等

本校は、バルセロナ市北部に隣接するサンクガット市郊外の丘陵地にあり、緑豊かな自然環境の中にある。校地面積は23,300㎡、校舎面積は2,522㎡、広い体育館と25mのプール、音楽室・理科室・図工美術室・家庭科室・コンピュータ室等を有する、施設・設備の充実した学校である。

(2) 設立経過等

バルセロナに進出した日系企業の顕著な伸びに伴い、子女の教育問題がクローズアップされる中、数年に亘る日本人学校設立準備の努力が実を結び、昭和61年（1986）4月にバルセロナ水曜会を設立母体とし、バルセロナ日本人学校が創立された。法律に基づきスペインの外国人学校として認可・登録され、その後法律の改正に伴い、カタルーニャ州政府の外国人学校として認可された。

(3) 学校運営等

学校の運営は、バルセロナ水曜会を代表する者7名・在バルセロナ日本国総領事館を代表する者1名・バルセロナ日本人学校を代表する者1名（校長）で構成されるバルセロナ日本人学校運営委員会が行う。学校運営委員会は学校運営の基本方針、現地採用教職員の人事、財産の取得管理、年次予算決算、その他学校運営上の重要事項の審議決定等を行うため、毎月1回開催される。運営費用は、日本政府からの補助金、企業寄付金、授業料、海外子女教育振興財団からの援助などにより賄われている。

(4) 児童生徒数・教職員等

昭和61年（1986）の創立時は小学部17名、中学部4名であったが、バルセロナオリンピックが開催された平成4年（1992）には小学部124名、中学部32名の計156名に達した。その後は減少傾向をたどり、最近5年間は小中合計で107名、108名、95名、89名、88名となっている。平成19年度の教職員数は、派遣教員14名、現地採用教員2名、同講師2名、事務・用務員4名の計22名である。

3. バルセロナ日本人学校の教育概要

(1) 学校教育目標

自ら学び 心豊かで たくましい子ども

(2) めざす子ども像

㊦・・・バイタリティに富んだ、たくましい子ども

㊧・・・ルールをつくり、守れる子ども

㊨・・・世界にはばたく、元気な子ども

㊩・・・論理的に考え、実践する子ども

㊪・・・仲良く、明るく、思いやりのある子ども

(3) 学校経営の理念

教育は、教師と児童生徒との人間的な触れ合いにより、一人ひとりの子どもの可能性を最大限に伸ばす営みである。本校のめざす子ども像「バ・ル・セ・ロ・ナ」を教育の基調とし、これからの国際社会に生きぬく資質・能力の育成をめざす。

(4) 教育課程等

日本（文部科学省）の学習指導要領に準じ、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間等の授業時数が適切にとれるように編成している。また、西会話を小1から小4までは週2時間、小5から中3までは週1時間、英会話を小3・4は週1時間、小5から中3までは週2時間入れて編成している。7校時、業間（20分）を弾力的に運用し、有効に活用している。なお、中学部卒業生の進路先は日本国内の国公立学校の他、インターナショナルスクール、現地校、在欧私立学校等である。

4. バルセロナ日本人学校において特に力を入れた取り組み

(1) 日本国内と同等の教育の推進 ー学力向上をめざした取り組みー

① 日々の取り組みこそ学力向上の最大の効果という観点から、組織的・計画的な教育指導による授業の量の確保を行った。1日7時間・週35時間まで組める日課表を活用し、7時間目は教科学習、行事や交流会の準備、学習支援等に充てるなど教育課程編成の工夫を行い、総授業時間数の確保を行った。

また、国内に帰国受験する生徒の多い中学部3年生は、5教科の時間数を増やし2学期末までに5教科の学習内容を終わるように配慮した。1日10分の朝自習を朝読書・詩の創作・英会話・西会話の時間として活用した。夏季休業中には、中学部は5日程度の補習を行った。なお、年間指導計画を基に作成された週案に基づいて行われる授業を、管理職が教室訪問して指導状況を把握し、指導・助言にあたった。

② “分かる・楽しい授業”の実現をめざし、学習指導の工夫改善を図るため校内研修を推進し、全教員が年1回研究（公開）授業を実施し、指導方法や指導内容の研修を深めた。平成19年度は前年度に引き続き、コンピュータを活用した「情報活用能力の育成」に取り組み、情報モラル教育も含めた「年間指導計画」を作成した。子どもたちは学年の発達段階に応じてパソコンや各種ソフトの操作や活用方法を学び、それを教科の授業の中に積極的に取り入れる工夫をしてきた。その中で、パソコンに触れる機会が増えスキルも上がり、情報モラルも身につけてきた。インターネットで調べたり、表やグラフを作ったり、図形を回転させたりできることで、学習に広がりや深まりが生まれ、より“分かる楽しい授業”が展開出来るようになった。

③ 授業での評価は小テスト・単元テスト・定期テスト・レポート・作品・実技・発表・ノートをとおして行い、あゆみ（成績通知表）で本人・家庭へ通知する。平成19年度は評価の基準や評定の仕方を1学期の成績通知前の保護者会で説明した。これは保護者の理解と信頼を得るのに有効であった。なお、本校では児童生徒数が少ない

ため、より客観的な学力把握の一助とするためNRT学力テストを小学部1年生から中学部2年生の全員が受け、その結果は本人・保護者へ通知している。

- ④ 授業参観・学級懇談会・教育相談・進路相談等の定期的な開催に加え、平成19年度は新たに成績通知表の見方の説明会、中学部保護者対象の「進路学習説明会」を実施した。また、学校だより・学年（級）だよりで学校での教育活動の様子を丁寧に伝えるようにするなど、保護者との連携強化に努めた。
- ⑤ 教育課程外の取り組みとして、海外では受験機会の少ない英検を希望者対象に日曜日に実施した。また、漢検を希望者対象に金曜日の放課後に実施した。更に、中学部の希望者対象に模擬試験を日曜日に実施した。

(2) 在外ならではの特色ある教育の展開

年間を通して行っている英会話、西会話を初め、国際理解教育として“現地校交流”“現地交流”“国際理解の日”等の学習を、「総合的な学習の時間」等を活用して積極的に推進している。

- ① 英会話・西会話はイギリス人とスペイン人の現地採用講師のみで行ってきたが、平成19年度からは初心者コースを英語・スペイン語に堪能な日本人教員が担当し、より分かり易くする工夫をした。小学部では歌を歌ったり体で表現したり、カードを使ったりCDを聞いたりと活動的な授業を工夫している。中学部では、話すことや書くことについて更にレベルの高い学習をしている。習熟度別クラス編成により、一人ひとりにあった指導が可能である。子どもたちは現地校交流での会話や日常会話ができることを目標に努力している。

また、平成19年度からは、授業だけでなく学校生活の中で英語・スペイン語を使う場面を意図的に設け、コミュニケーション能力を身に付ける取り組みを始めた。毎週火曜日の朝の活動の時間に、様々な場面設定での会話の練習をしている。私も一緒にスペイン語での挨拶や数の数え方を練習したが、子どもたちは工夫されたプリントを使い、大喜びで次々と相手を替えて会話し、交互にプリントにサインをもらっていた。更に、委員会活動の中での新しい取り組みとして、国際親善委員会が中心となり、月1回の業間活動で英会話・西会話をを使ったゲームなどを行った。また、放送委員会では、日本語に加えて英語やスペイン語でもアナウンスする機会を多くしたり、会話の例を紹介するなどの取り組みを積極的に進めてきた。

- ② 本校の総合的な学習のねらいと概要は、「①スペインと日本の共通点や違いを理解することを通して、母国に対する認識を深め、互いを認めようとする子どもを育てる。②現地での体験を生かして、自己理解を深め、主体的に行動することのできる子どもを育てる。」ことで、主な活動には「現地校交流」「現地交流」「国際理解の日」がある。

「現地校交流」は、現地校の子どもとの触れ合いをねらいとし、小学部はイシドロ校・マラガイ校と、中学部はアンジェレッタ校と来校・訪問の相互交流を行っている。イシドロ校との交流は本校創立以来続き、22年目となった平成19年度は、5月の「こどもの日の集い」で本校に迎えた。11月の訪問では、1・2年生はそれぞれ図工の授業を、3年生はスペイン語と身体表現の学習をし、休み時間にはバスケットボール・サッカー・鬼ごっこなどで遊び、イシドロ校の給食と一緒に食べるなど交流を深めた。交流前には不安を口にする子どももいたが、時間がたつにつれてすっかり打ち解け、言葉が十分ではなくても友だちができることを実感できた。

マラガイ校との交流は、平成19年度で15年目となった。11月の訪問交流では、パナジェット作り、コンピュータでの地図遊び、英語の歌・バスターネス・麻の刺繍の5つの活動を順番にした。最初は緊張して表情も硬かった子どもたちであったが、次第に自分から話しかけたり、座る席を交換したりするようになり、なごやかな雰囲気になった。軽食の時間にはケーキやジュースをごちそうになり、休み時間にはサッカーや鬼ごっこをして交流を深めた。言葉の分からない子どもも身振り手振りでコミュニケーションを図るなど積極的に活動していた。

アンジェレッタ校との交流は、平成19年度で11年目になった。11月の来校交流では、前半は剣道・書道・茶道に分かれて日本文化を紹介し、後半はサッカー・バスケットボール・日本の遊びを通して触れ合うことができた。

「スペイン語をたくさん使い、積極的に交流する」などの目標をもって、1・2年生が中心となって準備をし、交流を深めた。昼食は手巻き寿司の材料を自分たちで用意し、作り方や食べ方を教えながら日本食を紹介し、子どもたちの会話も更に楽しく弾んだようだ。

本校の「現地校交流」が長年にわたり内容を充実させながら継続してこられたのは、来校の際の小学部昼食作りなど保護者の理解と協力、現地校の先生方そして本校教職員の努力によるものである。これら諸活動の積み重ねにより、国際性豊かで国際人を自覚する子どもが育まれていくものと考えている。

現地校の子ども以外との接触や活動で現地に親しむ姿勢を養う目的の“現地交流”には、小学部のカルナバル参加、中学部のバルセロナ自治大生との交流、オープン参加のコルテマラソン等がある。

また、本校のスペイン人の職員が講師をしたり外部から講師を呼んで現地の文化に親しむことをねらいとした“国際理解の日”では、小学部でスペインの代表的な料理であるトルティージャ作りやガスパチョ作りをしたり、バストーネスやセビジャーナスといった踊りを体験学習している。

(3) 子どもたちの安全の確保

本校では日頃から安全に心がけ、危機管理の意識を高める指導を行っている。平成19年度は4月に“火災”，5月に“爆弾テロ”，10月に“不審者侵入”を想定した避難訓練を行った。子どもたちはそれぞれの目的をしっかり受け止め、真剣に取り組んでいた。11月には初めて“予告無しでの火災想定避難訓練”を行ったが、突然の避難訓練でも落ち着いて速やかに行動することができた。

また、地元警察署には、従来入学式・運動会・学芸会・卒業式当日に、特別に警備を依頼してきた。平成18年11月からは本校の管轄が国家警察からカタルーニャ州警察へ変更となったので、総領事館の指導・協力のもと、10月にカタルーニャ州警察局サンクガット警察署員に來校して頂く機会を設けた。署員の方々は警察の仕事や仕組み、困った時の警察への電話のかけ方など、“安全の基本”についてパワーポイントを使って分かりやすく説明してくれた。実際のパトカーの内部を見せたり、防弾チョッキを着用したりするなど実物を使っての説明に、自分たちや学校を守ってくれる警察官を身近に感じることが出来たようだ。

施設・設備の安全対策として、平成16・17年度に「窓保護枠の設置」「玄関扉の強化」等の工事を行った。更に、平成18年には緊急に安全対策を充実させる必要があるとのことから、バルセロナ水曜会に安全対策予算の追加を提案し承認して頂いた。その結果、「感知式警備用照明灯8基の増設」「体育館窓防犯シャッター」「南側階段明かり取り窓鉄格子の改善」等の追加・改善工事が完了し、施設・設備面での一層の充実が図られた。この事業に対し、海外子女教育振興財団から110万円の援助を受けた。

5. 学校運営上の課題と課題解決に向けた取組み状況

児童生徒数の減少による授業料収入の減少と、築17年目に入った学校施設設備の老朽化に伴うメンテナンス費用の増加により、学校は厳しい財政状況に置かれている。

そこで、学校運営委員会としては、①学校運営予算の中・長期計画を作成し、財政状況を踏まえた予算編成、②平成19年度から現地採用講師（英・西会話）を6名から2名に減員することによる人件費の削減、③授業料の値上げの検討、④毎月の学校運営委員会において予算執行状況を細かくチェックし学校予算執行状況を把握、⑤メンテナンス計画を作成し緊急性の高いものからの効率良い改修・修理を行う、など財政状況の改善に取り組んできた。一方、学校としては、①“分かる楽しい授業”に力を入れたより魅力ある学校・信頼される学校づくりの推進、②学校だよりやホームページで学校の良さを情報発信、③PRパンフレットの作成・配布、などを行い児童生徒数を増やす努力をしてきた。また、校長から教職員へ学校予算の詳細を配布・説明して財政状況の共通理解を図り、全教職員の意識改革を進め、物品や光熱費等の一層の節約による経費節減の努力を行ってきた。

6. おわりに

バルセロナ日本人学校に赴任し、日本から遠く離れた不慣れな環境の中でも明るく元気にがんばる子どもたちの教育に携わることが出来たことに感謝したい。また、子どもたちの教育だけでなく、財政面も含めた学校経営全般に携わることができたことは、大変貴重な体験となった。日本人学校での3年間の経験を、今後の学校経営に生かしていきたいと考えている。